

m | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15

特234 1

129 6

再校

迹

江

瀨

式

六

日

家
彌
佳
文



始



近江源長光陣館六の目

及人海心海心海心

心海心海心海心

心海心海心海心

心海心海心海心

花の葉の影をたもたぬを
 わかぬ花の影をたもたぬを
 花の葉の影をたもたぬを
 花の葉の影をたもたぬを
 花の葉の影をたもたぬを

花の葉の影をたもたぬを
 わかぬ花の影をたもたぬを
 花の葉の影をたもたぬを
 花の葉の影をたもたぬを
 花の葉の影をたもたぬを

大木なるは樹の根を以て
あつひらちを以て
かまはるは樹の葉を以て
重なるは樹の枝を以て
まはるは樹の幹を以て
まはるは樹の皮を以て

海水 三

海は水と云ふは
水は海と云ふは
海は水と云ふは
水は海と云ふは
海は水と云ふは
水は海と云ふは
海は水と云ふは
水は海と云ふは

此者其来りたかきか
氣精神人我かたの
かあか人海にれれ身なる
女房のいひかたかき
命のあはれなるかたの

所
記

かきかたのいひかた
あはれなるかたの
かきかたのいひかた
あはれなるかたの
かきかたのいひかた
あはれなるかたの

雲の底を穿てて来るか
ついでにこの世を渡るか
長き道の行者はついでに
高き山を越えて行くか
ついでにこの世を渡るか
ついでにこの世を渡るか

世に又

ついでにこの世を渡るか
ついでにこの世を渡るか
ついでにこの世を渡るか
ついでにこの世を渡るか
ついでにこの世を渡るか
ついでにこの世を渡るか

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in five lines. Small annotations and numbers are present above and below the main characters.

Handwritten text in a small box, possibly a page number or a section marker.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is arranged in five lines. Small annotations and numbers are present above and below the main characters.

かろくあつていひはりてい
こあひていひはりてい
の軍師兼ていひはりてい
か着あつていひはりてい
かろくあつていひはりてい

三 世 目

かろくあつていひはりてい
らあつていひはりてい
らあつていひはりてい
らあつていひはりてい
らあつていひはりてい
らあつていひはりてい

今更なる時を待たず
かゝる世を待たず
もつとて待たず
はたして待たず
はたして待たず

四六九

一に待たず
もつとて待たず
はたして待たず
はたして待たず
はたして待たず
はたして待たず
はたして待たず

首好いおかき人あつあつあ
らあひあひあひあひあひあ
んあひあひあひあひあひあ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひ

あふさあふさあふさあふさあ
あふさあふさあふさあふさあ
あふさあふさあふさあふさあ
あふさあふさあふさあふさあ
あふさあふさあふさあふさあ

あふさあふさあ

あふさあふさあふさあふさあ
あふさあふさあふさあふさあ
あふさあふさあふさあふさあ
あふさあふさあふさあふさあ
あふさあふさあふさあふさあ

不^{ムス}定^シなるが^ムら^シき^ムは^シき^ム
こ^シの^ムま^シり^ムを^ムた^シす^ム
な^シら^シか^シら^シず^ムに^シた^シる^ム
こ^シの^ムま^シり^ムを^ムた^シす^ム
な^シら^シか^シら^シず^ムに^シた^シる^ム

世に十一

行^ムむ^シは^シか^シら^シず^ム
勢^ムの^ムま^シり^ムを^ムた^シす^ム
な^シら^シか^シら^シず^ムに^シた^シる^ム
こ^シの^ムま^シり^ムを^ムた^シす^ム
な^シら^シか^シら^シず^ムに^シた^シる^ム

かゝるにやうな事があるか
雷の鳴るやうな事があるか
海に波が打つやうな事があるか
春よなごころの事があるか
かゝるにやうな事があるか

かゝるにやうな事があるか

かゝるにやうな事があるか
かゝるにやうな事があるか
かゝるにやうな事があるか
かゝるにやうな事があるか
かゝるにやうな事があるか

水びりあて 雲の 雲の 雲の 雲の
女が 女が 女が 女が
後接 後接 後接 後接
心 心 心 心
心 心 心 心
心 心 心 心

水びりあて

時 時 時 時
心 心 心 心
心 心 心 心
心 心 心 心
心 心 心 心
心 心 心 心

切なる心算の
いふ切なる箱算の
手算の算の算の
然るに算の算の
算の算の算の算の
算の算の算の算の

世六十六

算の算の算の算の
算の算の算の算の
算の算の算の算の
算の算の算の算の
算の算の算の算の
算の算の算の算の

奥のやうなわらわら
 31 通つてはくつた人
 中夜に逢ふことある
 時分はあつたか
 智恵のたぐひを
 習ふ

五ノ七 七ノ七

深人の御座るは
 奥のやうなわらわら
 中夜に逢ふことある
 時分はあつたか
 智恵のたぐひを
 習ふ

名の海に花をくさすは
のほろひの草をくさすは
唯の如く花をくさすは
と花をくさすは
いふに花をくさすは

市に花をくさすは
と花をくさすは
唯の如く花をくさすは
と花をくさすは
と花をくさすは

ひよろ海のあま泉統
女をうらみおのりて
皮の程も女をうらみ
倉をうらみおのりて
時夜もあま泉のあま泉

四十一

あま泉のあま泉のあま泉
あま泉のあま泉のあま泉
あま泉のあま泉のあま泉
あま泉のあま泉のあま泉
あま泉のあま泉のあま泉

大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て

大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て
 大勢の勢を以て

大勢の勢を以て

女家の縁起は縁起の縁起
の縁起は縁起の縁起
縁起の縁起は縁起の縁起
縁起の縁起は縁起の縁起
縁起の縁起は縁起の縁起
縁起の縁起は縁起の縁起

近六(廿五)

此の縁起は縁起の縁起
縁起の縁起は縁起の縁起
縁起の縁起は縁起の縁起
縁起の縁起は縁起の縁起
縁起の縁起は縁起の縁起
縁起の縁起は縁起の縁起

時如我が子^{ノコ}の如く^{ノミ}も人^{ヒト}の如く^{ノミ}も
 國^{クニ}の如く^{ノミ}も^ヲ守^ウらん^{コト}と云^トふ^{コト}
 衆^{タテマ}を^シて^シに^レは^レを^シて^シに^レ
 後^{ノチ}の^{ノチ}に^ニも^モた^ハず^{コト}
 此^ノ上^ニに^テも^モた^ハず^{コト}

和歌
 和歌

此^ノ上^ニに^テも^モた^ハず^{コト}
 衆^{タテマ}を^シて^シに^レは^レを^シて^シに^レ
 後^{ノチ}の^{ノチ}に^ニも^モた^ハず^{コト}
 此^ノ上^ニに^テも^モた^ハず^{コト}
 衆^{タテマ}を^シて^シに^レは^レを^シて^シに^レ
 後^{ノチ}の^{ノチ}に^ニも^モた^ハず^{コト}
 此^ノ上^ニに^テも^モた^ハず^{コト}

あつたしんじんをばつた
わらわをばつたしんじん
種をばつたしんじん
とつたしんじんをばつた
とつたしんじんをばつた
とつたしんじんをばつた

正子

いかにばつたしんじん
とつたしんじんをばつた
とつたしんじんをばつた
とつたしんじんをばつた
とつたしんじんをばつた
とつたしんじんをばつた

今接し後いよの道は
の好し本名は授く者身
造酒の以て授くは元
老こそは東邊のり
後我が果し老の海は

路六廿七

仲たのんは
東邊のり
今接し後いよの道は
の好し本名は授く者身
造酒の以て授くは元
老こそは東邊のり
後我が果し老の海は

道に多岐を授け給ふ事
有んば忠は信に成りて
これより故に成りて
徳を授け給ひて
時彼の方請て自來り

近世 元七

勢国を授け給ふ事
氣を遠くわたりて
徳を授け給ひて
か國を治む事
能く美の事

秀之君がうづ海軍部
此終の父公の秀俊海軍部
の軍師秀方公の軍部
利根の秋の自軍部
良今七の圃の方の自軍部

道六 九八

舞の生金と文の自軍部
秀俊の自軍部
秀方公の自軍部
秀俊の自軍部
秀俊の自軍部

妻なるも母後也
くつるも母後也
強妻なるも母後也
再く強なるも母後也
母なるも母後也

道六九九

母なるも母後也
母なるも母後也
母なるも母後也
母なるも母後也
母なるも母後也

人々を以てて
百もあはれ
尊^{ホト}くも
下^カを以てて
あはれを以てて

11-11

あはれを以てて
あはれを以てて
あはれを以てて
あはれを以てて
あはれを以てて

ひきまをたぐひて暖かい
のびたてのうらやまの
あまのなごみかたまたま
あまのなごみかたまたま
あまのなごみかたまたま
あまのなごみかたまたま

道六三十一

あまのなごみかたまたま
あまのなごみかたまたま
あまのなごみかたまたま
あまのなごみかたまたま
あまのなごみかたまたま
あまのなごみかたまたま

あつたはなむかひの
つらきまはるの
あつたはなむかひの
つらきまはるの
あつたはなむかひの
つらきまはるの
あつたはなむかひの
つらきまはるの
あつたはなむかひの
つらきまはるの

三十一

あつたはなむかひの
つらきまはるの
あつたはなむかひの
つらきまはるの
あつたはなむかひの
つらきまはるの
あつたはなむかひの
つらきまはるの
あつたはなむかひの
つらきまはるの

均ヒラカ後ノチ以モ上ノ三ノ浦ノ交ノ縁ノ女ヲ
於レ心ノ向ル津ノ及ク女ヲ之ノ後ニ
ちノ心ノ氣ノづクのノあリきノをシ楚ノ
のノ二ノ浦ノのノ民ノ舞ルをシ楚ノ
西ノ道ノ有ル以テ楚ノのノ今ノとシ楚ノ

楚ノ民舞ルをシ楚ノ

乃ハ楚ノのノ民ノ舞ルをシ楚ノ
もシ楚ノのノ民ノ舞ルをシ楚ノ
乃ハ楚ノのノ民ノ舞ルをシ楚ノ
乃ハ楚ノのノ民ノ舞ルをシ楚ノ
乃ハ楚ノのノ民ノ舞ルをシ楚ノ
乃ハ楚ノのノ民ノ舞ルをシ楚ノ

致^チん^ンあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ル
水^ミの^ノ清^スく^クあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ル
衆^{シュ}の^ノ道^{ダウ}に^ニあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ル
と^トあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ル
の^ノ道^{ダウ}に^ニあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ル

世々 三十一

世^セに^ニあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ル
人^ニあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ル
及^キん^ンあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ル
あ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ル
の^ノ道^{ダウ}に^ニあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ルあ^アら^ラわ^ワる^ル

養老若くは人々の集り
 遠くまでいかにあつた
 かろくは真に命を
 入送る暇をたてて
 入送る暇をたてて

昭和二十三年

浪苑 和田

昭和五年八月十三日印刷
昭和五年八月廿三日發行

稽古本
近江源氏先陣館

不許
複製

編者 玉井清文堂編輯部

發行兼印刷者 玉井清五郎

東京市神田區表神保町十番地

(行印部顯印堂文前)

發行所

東京市神田區表神保町一〇
電話神田二二三三三番
振替東京三二一八番

玉井清文堂

終

